



世界遺産への登録をめざす

武家の古都・鎌倉ニュース

Vol.30

冬号 / Winter 2013

第30号

平成25年(2013年)12月発行

発行：鎌倉市 編集協力：内海恒雄

◆ 鎌倉世界遺産登録推進協議会 ☆平成25年度第2回総会開催 ◆

現推進協議会の終了と再挑戦時の再設立を確認

平成25年11月30日(土)、鎌倉生涯学習センターホールにおいて、当推進協議会の平成25年度第2回総会が開催され、参加団体より34名の会員が出席しました。



松尾崇推進協議会会長による挨拶

冒頭に当会会長の松尾崇鎌倉市長から「役員会において、今後の本会のあり方について議論し、一定の方向、結論を出すことができた。今、我々が今後、世界遺産を再挑戦する中でどのように行動していくことがいいのかということを含め、市民が一体となった取り組みのためにはどのような選択肢がいいのか、様々な貴重なご意見をいただいた。会場の皆様方にもこの役員会の判断を確認し、受け止めていただくようお願いする。この鎌倉の貴重な歴史的遺産を守り、後世に伝えていくために、これからもぜひとも皆様方のお力をお借りしたい」と挨拶がありました。

行政の取り組み状況報告

役員紹介の後、事務局から、行政の取り組みと役員会の結論について報告がなされました。まず、行政の取り組みについては、1点目として、鎌倉市が引き続き登録推進に取り組む方針のもと、世界遺産のあるまちをめざすための基盤を整え、世界遺産登録に結びつくコンセプトの再検討を進める旨を第3期基本

計画に明記する点。2点目は、国県市が連携して、イコモス勧告の詳細分析、鎌倉の歴史的資産の実態調査や価値の再検討、内外の専門家への意見聴取に取り組むこと。3点目として、登録推進の課題として、①再推薦の可能性の見極めと今後の取り組みスケジュールの確立、②社寺との協力体制の確立の2つを最重点として、その解決に全力を尽くす必要があるとの考え方が示されました。

役員会結果報告

続いて、役員会の結果については、「推薦取り下げを受けてコンセプトが消滅したので、第一次の協議会の役割は終了した。第二次の会は、イコモス勧告の分析が終了し、世界遺産登録の再挑戦への目処がついた段階で、改めて、組織のあり方も含め、検討し、立ち上げる。その財源は、現在の協議会が持っている残余財産を担保としていく」とのことでした。

参加団体の発言

その後、会場からは、「市民一人一人がこのまちを世界遺産にするのだという気持ちになって協力し合い、再び、市民運動の高揚を再現して歴史遺産、世界遺産をめざしていこうではありませんか」との呼びかけのほか、「解散という言い方ではなく、協議会の第1次の役割は終了という文言に賛成。第2次再挑戦に向け、結集したエネルギーを市民力が萎えないうちに盛り上げて行きたい」さらには、「鎌倉の中学生や青少年指導員が世界遺産に指定されるようお願いを込めて中学生の作文コンクールに一生懸命取り組んでいる」とのお話がありました。

この3名の方の意見表明の後、役員会の結論について拍手をもって確認がなされ、閉会となりました。

◆ 鎌倉市民文化祭 オープニングイベント 講演 ◆

世界に誇れるまちづくりをめざして

平成25年9月21日(土)、鎌倉生涯学習センター(きらら鎌倉)で、「世界に誇れるまちづくりをめざして」と題して、鎌倉市が「世界遺産登録」という一つのまちづくりの手法をどのように使い、今後どの様に取り組もうとしているのか、世界遺産登録推進担当担当次長の吉田浩さんが講演しました。以下要旨です。



なぜ世界遺産に登録すべきなのか？

世界遺産とは「人類共通の宝」です。鎌倉は武士の世が始まった場所であり、京都、奈良と並ぶ日本の宝です。この宝を永久に守っていくことを世界に向かって宣言することにより、自らに「歴史的遺産を守り後世に伝えること」を義務づける。これが世界遺産登録の本質であり、地域経済への波及効果や利益を期待するものではないと考えています。

鎌倉は魅力的なまちであり、開発圧力は高くなっています。鎌倉の保護体制が国際的に高い評価を得ているといっても、法的規制だけでは限界があり、自分たちが多少の犠牲を払ってでも、鎌倉のよさを後世に守り伝えようという強い意思が必要です。

世界遺産になると

世界遺産というタイトルを持つことは、特に子どもたちにとって非常に有効です。鎌倉の文化財、鎌倉らしい佇まいといったもののもつ大きな意味に気づきます。観光客へのマナーアップや交通、都市景観、観光など様々な分野での取組を強化しやすくなり、国や県の支援も受けやすくなります。世界遺産になった場合の渋滞激化や観光客の増加が心配されていますが、それらへの対策を講じれば、登録の効果を十分実感できると思います。

世界遺産をめざしてどんな成果があったのか？

鎌倉を深く学び、理解が深まったこと、それによって鎌倉を大切に思う気持ちを行動に表す市民の皆さんが増えたことが挙げられます。鎌倉にはたくさんの史跡があり、八百年前の姿を静かに伝えていることを知っていただきました。また、見回り活動として、史跡や三方の

山を見回って、異常があればすぐに通報いただくボランティア活動なども始まりました。

● 世界遺産をめざし景観が守られた

構成資産を取り巻くバッファゾーンを守るため、鎌倉の中心である若宮大路周辺地区に、都市計画決定による景観地区の指定が実現し、建築物の高さを15m以内に制限する法的なルールが設けられました。また、多くの事業者の協力を得て、看板や自動販売機の色が景観に配慮した色になり、鎌倉らしい落ち着いた雰囲気が醸し出されています。こうしたことは、鎌倉に住んでいると当たり前のように思われるかもしれませんが、近隣のまちと比べると、その差は一目瞭然です。

● 世界遺産をめざし歴史的遺産の保護が進んだ

国から新たに43ヘクタールの史跡指定を得て、保護を強化できました。新たに17の史跡について、史跡保存管理計画が策定され、史跡の保存と活用のルールが決まりました。また、新たな文化的発信拠点として、東京の公益法人から、地域の歴史・文化活動拠点としての土地・建物、資金の寄付があり、現在、仮称「鎌倉歴史文化交流センター」の建設準備を進めています。

「歴史的遺産」とともに生きるまちづくり

ご承知のとおり、日本政府は推薦書を取上げて「再推薦」をめざすことになり、その結果を踏まえて鎌倉市は、再推薦に向けた検討を進めるとともに、歴史的遺産、景観、市民生活を守ることを柱とした「歴史的遺産とともに生きるまちづくり」を推進することにしました。

具体的には、現在策定中の次期基本計画に基づき「歴史的遺産と共生するまちづくり」をめざします。これは、世界遺産登録が少し遠のいた今、改めて打ち出した市の方針、世界に誇れるまちづくりへの道筋と考えるものです。

登録の可能性

登録にたどりつくには、世界遺産に関するデータを分析し、再推薦の可能性を検討し、そうした情報を市民全体で共有することです。不記載の最大の理由は「物的証拠の不足」と言われ、イコモスは「武家の古都・鎌倉」は都市なのだから、政治、経済、文化など、様々な要素がそろっていないと資産として不完全だと判断しました。

しかし、それは世界レベルの資産が鎌倉に何もないということではありません。社寺や切通といった武家文化を物語る物的証拠は確かに存在するのです。イコモス側の認識も「本資産は武家により成立し、その後日本全体に

広がった文化的、精神的価値を表している」と書いています。私たちが守りたいもの、守るべきものは何かを明確にし、特に重要な歴史的遺産を核として、世界に伝わるコンセプトを検討しています。今年度中に、その方向性をお見せしよう、そういう心構えで頑張っているところです。

鎌倉の現代的な価値

鎌倉は過去の実在ではありません。現代の世界における存在意義を私たち一人一人が意識すべきだと思います。私の場合は、現代世界に不可欠な三つの考え方が生まれ育った場所だと考えています。

一つ目は「地域主義」、地域主権です。武家のための武家による武家の都が生まれた所です。

二つ目は「多極主義」、多様化(ダイバーシティ)です。畿内への一極集中が回避され、列島に多様な価値観と多様性を生み出しました。多様性を認め他文

化と共生することの重要性は、今日の世界全体においてもまた同様でしょう。

三点目は「平和主義」です。暴力をふるう存在だった武家が、政治的訓練を積みながら高い教養を身につけ、統治者に転換していきました。世界各地で戦争状態にある人々に、日本の武家を見習いなさい、早く武器を捨て、よき統治者となちなさいと言ってやりたいと思っています。

おわりに

鎌倉には、幾重にも時代が重なり、そこから醸し出される佇まいと歴史的風土があり、そこに住もう人たちがその気配に包まれて、教養と品性を高める、そうした人たちが力を合わせてまちづくりを進め、ますますこのまちがよくなる。そうした好循環に至る所に見つけながら未来に向かって責任を果たす。それが鎌倉ではないかと思います。

鎌倉歴史文化交流センターの整備について

鎌倉市は世界遺産登録推進の一環として、世界遺産の構成資産などを紹介するための「(仮称)世界遺産ガイダンス施設」の整備計画を扇ガ谷1丁目用地に進めてきました。その途上の6月4日に日本政府が推薦の取り下げを発表したため、計画の見直しを行うことになりました。

平成25年度は世界遺産登録はなりませんでした。鎌倉の持つ歴史的意義や歴史的遺産の価値は変わりません。今後は、「(仮称)鎌倉歴史文化交流センター」として、子どもから大人までが、鎌倉の歴史や文化について学ぶことができる場、歴史的遺産について触れることのできる場として、また、歴史や文化に関心を持つ人たちが集える場として、計画を進める予定です。

整備計画の背景

一般財団法人センチュリー文化財団から「鎌倉市の文化財保護及び世界遺産登録に向けた取り組みに活用し、鎌倉市の教育文化の向上・発展に寄与するため」として、扇ガ谷1丁目の土地・建物について寄附がありました。8月23日には、その整備のために施設整備費助成金15億円の寄附も追加されました。

これらを含め、扇ガ谷1丁目用地において市が取得した土地は約1.5ha、建物(鉄筋コンクリート造)は3棟で総延床面積は約1,750㎡です。

今後、市では、これら取得した土地、建物及び8月に寄附された施設整備費助成金を活用し、「(仮称)鎌倉歴史文化交流センター」等の文化施設整備を進めます。

今後の活用予定

【(仮称)鎌倉歴史文化交流センター】

既存の建物(イギリスの建築家ノーマン・フォスターのデザイン)を活用し、埋蔵文化財展示機能、歴史的遺産等のガイダンス機能、学習機能を備え、交流する場として会議室等を併設した施設が整備される予定です。



【(仮称)鎌倉博物館用地】

敷地面積が約5,500㎡あり、延床面積4,000㎡超の建築物が建築可能です。この場所では、(仮称)鎌倉歴史文化交流センターと併せて鎌倉の歴史博物館が整備される予定です。最終的には、国宝・重要文化財の展示ができる公開承認施設である博物館の整備をめざしています。





平成24年度 冬季講座 第2回要旨

金沢文庫と称名寺

とき：平成25年3月2日(日) ところ：金沢文庫 称名寺

『武家の古都・鎌倉塾』冬季第2回では、金沢文庫と称名寺を見学し、その歴史を学びました。

◎称名寺と庭園

称名寺は金沢氏の菩提寺であり、多くの学僧が集う学問の寺として繁栄した。13世紀中頃、鎌倉幕府二代執権北条義時の孫にあたる実時の持仏堂として創建され、三代にわたって伽藍や苑池が造営された。

南の仁王門から池を東西に分けて反橋、中島、平橋を渡り、金堂に至る形式は平安時代中期以降盛んに築造された浄土庭園としては最後の遺例にあたり、平安・鎌倉時代の造園様式を伝えるものとして日本の庭園史で重視されている。

金沢は鎌倉の外港である六浦を抱え、東京湾を介した交通と軍事上の要衝、すなわち鎌倉の東の要衝であり、称名寺は防御を重視した鎌倉幕府の政権所在地としての造営の在り方の特徴を示していると言える。

当時は仏教教学の研究がとりわけ盛んに行われ、「金沢学校」とも呼ばれる日本における中世の大学であった。そのため、収集品は教学研究のための中国伝来の美術工芸品、書籍、典籍などの文物を主体としており、武家文化の成立には中国文化が重要な影響を及ぼしたことを示している。

江戸時代には金堂や仁王門、釈迦堂などが再建されたものの、寺勢は衰退し、大正初期の写真を見ると、裏山には茅が生い茂り、境内は一面が水田となっている。史跡としての維持管理の必要性から、大正11年(1922)に「称名寺内界」が史跡に指定され、翌年に神奈川県久良岐郡金沢村が管理団体に指定された。昭和53年



から62年にかけて発掘整備事業が実施され、調査結果と鎌倉時代の絵図に基づいて苑池と平橋・反橋が復元された。その他境内には、もともと僧が行っていた墓塔を建てる習慣を武家に取り入れたことを示す、実時をはじめとする金沢北条氏一族のものとする墓塔がある。

現在は境内の日常管理を称名寺愛護会に委託している。

◎金沢文庫

鎌倉文化の特徴を示す称名寺伝来の文化財を保管しており、和漢の典籍や仏典、古文書、美術工芸品など、その数は約二万点にのぼる。



鎌倉幕府で執権・連署をつとめた北条氏の有力な分家であった金沢氏が収集した和漢の典籍や記録、金沢氏の家政運営のための家政運営のための文書などを保管する邸内の書庫として設置された。創設の時期は明らかではないが、北条実時の晩年、建治元年(1275)頃と考えられている。

収蔵品は鎌倉幕府滅亡後、菩提寺であった称名寺に引き継がれたが、一部は戦国大名の後北条氏や徳川氏などによって持ち出され、鎌倉武家の教養が後世の武家に影響を与えることになった。収蔵品の中には鎌倉幕府の中枢にいた金沢北条氏ならではの、当時の政治情勢を伝える書状や、鎌倉の寺院間での茶の贈答、称名寺や鎌倉の宅間ヶ谷に茶園があったことなど、禅宗寺院以外にも喫茶の風習が広まっていたことを示す文書などが伝わっている。このように、称名寺と金沢文庫は鎌倉時代の武家の教養や文化を様々な形で今に伝える貴重な遺産である。

現在の金沢文庫は神奈川県によって復興され、歴史博物館及び生涯学習の一拠点として活用されている。

◆ 対談 五味文彦さん × 馬淵和雄さん ◆

鎌倉の歴史遺産をどう遺すか ～鎌倉世界遺産登録への道～

私たち市民が日常的に見られることからさほど重要と感じていない鎌倉の遺跡がどれほどの価値を持っているのか、またその世界遺産的価値について明確に知りたいと考え、日本中世史を牽引し続ける五味文彦さん(放送大学教授・東京大学名誉教授)と、日本中の文化財の保護活動を展開している馬淵和雄さん(日本考古学協会理事・考古学)のお二人に、鎌倉の文化遺産の保存展示の可能性と未来について伺いました。その要旨を掲載します。

大倉御所跡の世界遺産的価値とは？

馬淵 大倉御所跡の遺構の全容を発掘保存展示するのは大変ですが、私が調査した地点の例では、非常に大きな1×2mくらいの柱穴の跡があって、その底の礎石代わりに敷かれた板(礎板)も長さ1m近い巨大なものでした。これほど大きな柱の建物が一棟でも発掘されれば、中世前期で例をみません。日本文化の基本的な骨格のひとつ、武家政治の発祥の地ですから、鎌倉の大倉御所は700年間続く武家政権の最初の場所です。日本史上屈指の重要な遺跡といえます。

五味 戦国時代になると城と城下町ができ、古代には都城を築いていますが、その間にある中世ではそれほど立派な御所は造らなかったと考えています。しかし馬淵さんの言うように非常に大きな掘立柱の跡が出たということであれば、御所は相当規模の大きな建物だったと考えてよいでしょう。現在の清泉小学校の場所で大倉御所跡の主要な建物があったというので、本来あそこは市の土地だった経緯もあり、現在の所有者は教育機関ですから、市から話し合いの場を設けて保存していく方法を探るべきでしたが、それが進まなかった。また平泉では、柳御所跡が世界遺産から外されたことも影響して、鎌倉の世界遺産の推薦書をつくるにあたり、御所跡に触れない形にしたわけです。しかし、武家の本拠地と言う限り、それをしっかりと物証として提示するべきだったと今は思っています。早い段階で、武家政権の御所と言うのは京都にも無論ない。大倉御所跡の保存を市の所有地であった時代からやっていれば、そのまま世界遺産になっていました。

馬淵 物証がないわけではなく、地下遺構としてある。全容は大変だが、一部ずつでも発掘し保存公開していくことが大切です。なお横浜国大附属小中学校の校庭部分まで大倉御所の範囲と考えられます。

鎌倉の都市遺構を現わすために、 現在保存展示可能な遺跡は？

馬淵 大倉御所のほかに、杉本寺の前の福祉施設がありますが、その下にはベタ基礎に設計変更してもらって遺すことができた、すごい遺跡があります。私の考えでは、杉本義宗から受け継がれている三浦氏の拠点だと思います。グラウンド全体は市の所有ですが、全体を把握するための調査が必要ですね。また御成小学校の武家屋敷跡や、元は源義朝の居館と『吾妻鏡』に記述のある寿福寺境内の調査も必要でしょう。

五味 都市性を顕す遺構としては、鎌倉中なら掘ればどこにでもあるような方形の堅穴遺跡、庶民の生活跡を見せることができます。しかし発掘されても保存展示していない。今後は考えるべきです。

馬淵 浜には、鎌倉の他は鹿児島県薩摩半島の港湾遺跡にしか見られない、壁で立ちあげていく大陸技法の堅穴建物がある。やぐらも重要な文化財だが、年々消滅している。やぐらと前面の平場の組み合わせこそ中世の景観なので、これを遺して公開するべきです。大町釈迦堂口遺跡や十二所の納骨堂跡なども、国指定史跡なので、整備・公開しなくてはもったいない。

鎌倉の文化財の価値を市民と共有するために

五味 鎌倉市が中心になって調査研究をする。しかしこれまでの経験で、それだけでは不十分です。鎌倉市を中心にしながら、それを支えるために学者は科研費を取るなどして、研究できる体制をつくっていく。財団からの寄付や補助なども積極的に活用して、独自に動ける委員会や、研究組織をつくることが重要です。

馬淵 発掘に市場競争原理が入ると、入念な遺跡調査ができなくなります。優秀な人材が鎌倉から流出するという大きな問題もあり、調査体制の整備は急務です。

五味 中世初期の幕府の記録である『吾妻鏡』があるために、武家政権成立の過程が詳細にわかるという、これは他の時代にはない貴重な史料です。『吾妻鏡』の記事と考古学的成果を照らし合わせていく場も、研究組織を実現して強化していかなければなりません。そして、その成果を市民に常に発信することにより、鎌倉の歴史遺産の大きな価値を、市民とともに共有して、鎌倉の未来を守っていくことができると考えています。

News! the 世界遺産

子ども大学かまくらがスタート! 鎌倉の歴史を学び、世界遺産をバックアップ

「子どもたちの考える力、応用力や判断力を育てよう」大学教授やその道の専門家が、具体的な事例や体験をまじえながら鎌倉在住の小学4,5,6年生100人を中心に授業をして、問題意識や好奇心を刺激し、学ぶことに積極的になってもらうという目的で、『子ども大学かまくら』が2012年12月に開校しました。

学長には養老孟司東大名誉教授が就任し、入学式の後には「勉強ってなあに」(2012年)「考えるってなあに」(2013年5月)というテーマで授業をしました。

学びの柱は「はてな学」「生き方学」「ふるさと学」の3本です。

2012年度は、鎌倉の世界遺産登録をバックアップするために、子どもたちに鎌倉の歴史を知ってもらうことが大切と考え、4回の授業テーマを「鎌倉の歴史」に絞りました。1回目は「なぜ鎌倉に幕府ができたか」(講師、

三浦勝男元鎌倉国宝館館長)、2回目は「なぜ鎌倉にお寺が多いのか」(講師、秋山哲雄国士館大准教授)、3回目は「鎌倉大仏のふしぎなヒミツ」(講師、佐藤美智子高德院副住職)、4回目が「鶴岡八幡宮のふしぎなヒミツ」(伊藤一美鎌倉考古学研究所理事)でした。

「子ども大学かまくら」のホームページに授業内容が公開されています。



EDITOR'S NOTE

推進協議会の臨時役員会で「鎌倉世界遺産登録推進協議会の終了」が決まり、総会で報告・確認されました。「武家の古都・鎌倉」の世界文化遺産登録をめざして、推進協議会にご参加いただいた団体と会員の皆様の活動に心から御礼申し上げます。

『武家の古都・鎌倉ニュース』は今号で一旦終わります。平成十八年七月の創刊号には、推進協議会の設立趣意書が掲載されています。そこには、鎌倉が武家文化発祥の地であり、武家の文化が生まれ育まれ、日本文化の新たな発展とともに、日本人の精神や文化のよりどころとなっていること、鎌倉の重要な歴史的遺産の価値が日本や世界の貴重な財産として大切に保存され、後世の人々に継承されていくことが、世界文化遺産への登録の目標であるとされています。そして歴史的遺産や周辺の自然環境を守る努力と、市民の生活の場と歴史的環境が共存する鎌倉らしいまちづくりを実現していくために、市民・事業者・

編集後記

行政など多くの人々の共通認識や取り組みが重要だと述べています。

これを受けて推進協議会では、登録推進事業部会と広報部会により、さまざまな事業がそれぞれの実行委員会で行われました。その主な項目には、美術・写真コンクールの実施、武家の古都・鎌倉塾の開講、鎌倉まつりへの参加、市民意見の聴取、パブリシティの促進、出版物の製作・発行、DVD等資料の活用、ホームページの充実、掲示等の促進、グッズの製作等があり、多彩な活動をしてきました。

ユネスコへの推薦取り下げにより、推進協議会の役割は一旦終了しましたが、世界文化遺産登録への再挑戦の道が開けたところで、改めて組織の在り方を含めて検討し、立ち上げることになっています。

鎌倉は、世界で唯一の武家文化の遺産を後世に遺すことができるまちです。文化遺産を守り、住んで良い訪ねて良い「まちづくり」を皆様とともに進めていけば、鎌倉の世界文化遺産登録は必ず実現することでしょう。

内海恒雄

【編集協力】大竹正芳 香山 隆 菊池威雄 草場圭三 小池潮里 佐藤江里子 高木規矩郎 都筑健一 長田裕之 能登原秀実 萩野なおみ 福澤健次 牧れい花 森まなみ 【デザイン】澤田ながえ

鎌倉世界遺産登録インフォメーション&放送スケジュール

インターネット

● 鎌倉世界遺産登録推進協議会HP <http://kamakura-wh.org/>

FMラジオ

● 鎌倉FM(82.8MHz)… 毎週金曜 19:10~19:30 「鎌倉世界遺産への道」

ケーブルテレビ

● JCN鎌倉… 7Days デイリー 月曜~金曜 17:50~(当日再放送あり)

鎌倉市世界遺産登録推進担当

〒248-8686 鎌倉市御成町18-10

Tel.0467-61-3849 Fax.0467-23-1085 E-mail:sekaiisan@city.kamakura.kanagawa.jp